信濃教育会研究発表会（オンライン②）

令和 6 年 6 月 26 日

佐伯胖所長　開会の挨拶

今日はお忙しい中を第 77 期の 研究員の発表にご参加いただきまして、本当にありがとうございます。東京はまだ暑くて、本当に酷暑というような日が続いておりますが、なんとか頑張っております。

今日の発表をお聞きになるにあたって、ちょっと今まであまり聞いたことのないような考え方が入っていますので、そのことについて、1 つ説明してみたいと思います。それは「中動態」という動詞なんです。動詞には能動態と受動態というのがあるっていうのは、これは、学校教育で我々もよく教わってますが、「中動態」というのは、あまり聞いたことないかもしれませんが、実は、教育を考える時に非常に大事な考え方なんです。「中動態」というのはね、動詞なんですけれども、目的を持たない動詞なんですね。何かをしようという目的はないんですよ。目的がない動詞ってあるのかなということですけどもね、実は目的を持たないことによって生まれる動詞なんですね。

例えば、眠るという動詞は、眠ろうと思って目的意識を持つと眠れなくなっちゃうんですよね。で、そういうふうに何かをしようとするという意識をあえてしないという動詞なんですね。 皆さんは教育において子どもの主体性を大事にする、大事にするということはよくお聞きになると思うんですがね、その主体性を大事にするということは、教え手の方で、教えるという意図をあえて持たないということなんですよ。

教える意図を持たないで教えるなんて、そんなことあり得るのかと思っちゃうと思うんですがね。実は、それがまさに「中動態」という動詞なんです。つまり、「中動態」というのは、先ほどの「眠る」ということの要因と、「それをしようという目的を持たないで事態の変化に任せる」、それによって、「中動態」動詞による変化が起こるわけです。その変化の中に巻き込まれる、つまり、眠る場合は、眠っている本人が睡眠に巻き込まれ、眠っていることの中に巻き込まれているのですね。そうすると、教えるということをやめて何を見るかっていうと、子どもが自分から学びだすことを見て、自分もその子どもの学び始めている世界に巻き込まれるということなんですね。そういう教育のあり方ということはあまり語られてきてはいないかと思いますが、これが「中動態」なんです。つまり、あえて目的意識を持たないで、どうなるのかなっていうことを相手に任せるような思いでそこにいて、相手が何かを始めた時にその活動の中に教師も巻き込まれていくという。そういう教育という営みというのが実はある。それが実は、本当に主体性を大事にするという教育なんですね。

ですから、「主体性を大事にする」っていうのは、「じゃあどうしたらいいんですか」っていう話じゃない。どうもしないで、 子どもの本当に自ら学ぶという世界に巻き込まれると

いうことです。こういうような教育のあり様が今日の発表の中で色々見られるんじゃないかと思います。どうぞ皆さんも、その世界の中に巻き込まれて、発表されてる方の気持ちの中に入り込んで、発表をお聞きいただけるといいかなと思います。